

「般若經」における無記¹⁾について

山 口 務

「般若經」の成立史を解明するために阿含的表現について比較してきたが、今回は無記について調べることにする。無記とは釈尊が判断を保留した項目でその内容は「世間は常か無常か」、「世間は有限か無限か」、「靈魂と身体は同一か異なるか」、「如来は死後存在するか、しないか」である。そしてこれらについて各々四句分別するかしないかで項目の分別数が異なり、10 無記、14 無記、16 無記の別が生じる。以下では便宜上、項目の分別数と項目順を挙げて比較する。

A) 南方上座部 (10 無記 : MN., Vol. I .p. 484, 1.5 ~ p. 485, 1.7 etc.)

常 2 句, 有限 2 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句

B) 有部系

(1) 『中阿含』 (10 無記 : 大. 1, 803c-805c)

常 2 句, 有限 2 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句

(2) 『雜阿含』²⁾ (14 無記 : 大. 2, 246a 等)

常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句

(3) *Mahāvīyutpatti* (14 無記 : No. 4653-4666)

常 4 句, 有限 4 句, 如来 4 句, 靈魂 2 句 靈魂が最後に来るのが特徴である。

(4) 『集異門足論』³⁾ (14 無記 : 大. 26, 400a)

常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句・但し常, 有限はともに「我及世間」について言われ「我」が付加されている。

C) 法藏部系

(1) 『長阿含』⁴⁾ (16 無記 : 大. 1, 75c)

常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 4 句, 如来 4 句・4 項目すべてに 4 句分別される。

(2) 『四分律』 (10 無記 : 大. 22, 991b)

常 2 句, 有限 2 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句

(3) 『舍利弗阿毘曇論』 (16 無記 : 大. 28, 599c)

常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 4 句, 如来 4 句・但し常, 有限はともに「我及世間」

について言われ「我」が付加されている。

- D) 大衆部系 (14 無記 : *Abhidharmakośabhāṣya*, p. 294, ll. 1-4, Bhadantamahāsāṅghikāḥ sūtram paṭhanti としして引用する。) ⁹⁾

常 4 句, 有限 4 句, 如来 4 句, 靈魂 2 句・有部系 (3) *Mahāvvyūṭpatti* のものと一致する。

- E) 所属部派不明

- (1) 『増一阿含』 ⁹⁾ (10 無記 : 大. 2, 672b)

常 2 句, 有限 2 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句・南方上座部, 有部系 (1) 『中阿含』, 法蔵部系 (2) 『四分律』と一致する。

- (2) 『別訳雑阿含』 (14 無記 : 大. 2, 445c, 448c)

常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句・有部系『雑阿含』に一致する。

次に「般若経」諸異本における無記の内容は次の 6 タイプに分けることができる。但し「般若経」の場合, 常, 有限はすべての異本において「我及世間」について言われている。

- I. 『道行』 (14 無記 : 大. 8, 449c)

如来 4 句, 常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 2 句・このタイプは小品系にのみ ⁷⁾ 見られるもので, 如来 4 句から始まる 14 無記である。

- II. 『第二会』 ⁸⁾ (14 無記 : 大. 7, 228b-229b)

常 4 句, 有限 4 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句・これは有部系 (4) 『集異門足論』と一致する。

- III. 『仏母』 ⁹⁾ (14 無記 : 大. 8, 631a-b)

常 4 句, 有限 4 句, 如来 4 句, 靈魂 2 句・これは靈魂 2 句が最後に来る 14 無記であり, 有部系 (3) *Mahāvvyūṭpatti* と大衆部系に一致する。但し常と有限が「我及世間」について言われる点が異なる。

- IV. 『一万八千頌』 Tib. 訳 (14 無記 : Peking Ed., Vol.20, Pi, 121b⁷-122b¹)

常 4 句, 有限 4 句, 死後 4 句, 靈魂 2 句・死後とは今までの「如来が死後存在するかどうか」ではなく, 「我及世間が死後に存在するかどうか」という項目である。これまでに出来た「如来」 *tathāgata* の本来の意味は有情の根底にあるものを指しているから「我及世間」の「我」は *tathāgata* にも通じる。 ¹⁰⁾ 従ってタイプ IV. では *tathāgata* を用いずに「常」, 「有限」についてと同じく「死後」についても主題を「我及世間」にしたと解釈することもできる。

- V. 『二万五千頌』 Skt. 本 (18 無記 : ed., Kimura, Vol.4, p.64, 1.3-p.65, 1.10)

如来 4 句, 常 4 句, 有限 4 句, 死後 4 句, 靈魂 2 句

これはタイプⅣ. に「如来 4 句」を加えたものである。この場合 *tathāgata* とはもはや有情の根底にあるものではなく如来そのものを指しているのかも知れない。

Ⅵ. 『十万頌』Skt. 本 (18 無記: 東大写本 382-c, 366b⁵-367a⁴)

常 4 句, 有限 4 句, 死後 4 句, 靈魂 2 句, 如来 4 句

タイプⅤ. と同じく, タイプⅣ. に如来 4 句を加えたものであるが, その項目を最後に置いている点が異なる。

「般若経」に見られる 6 タイプの無記の内容の中, タイプⅣ. ～Ⅵ. は時代が下って新たに付加されたものと思われる。そしてタイプⅡ., Ⅲ. は有部系や大衆部系の無記と一致していた。しかし, 「般若経」諸異本の中, 最初期の異本である『道行』をはじめ小品系の 5 異本に見られる無記の内容は如来 4 句～靈魂 2 句までの 14 無記であるが, これが現存アゴンには全く見出せない。また, 六神通などの比較では法蔵部系アゴンと一致する「般若経」の異本があったが, 無記の内容に関しては法蔵部系と一致するものが皆無であった。

1) 無記は一般に *avyākṛta* が用いられるが「般若経」においては *unmiñjita* (肯定的見解), *nimiñjita* (否定的見解) を説く中で無記の内容を挙げる。 2) *Upāyikā* (Peking Ed., Vol. 118, Thu, 16b⁴⁸), 『根本有部律』(大. 24,333a), 『大般涅槃經』(大. 12,596c), 『大乘涅槃經』(大. 12,844c) も同じ。 3) 大. 26,402a には有部系 (2) と同じものがある。 4) 大. 1, 111a には後出の法蔵部系 (3) と同じものがある。 5) 省略部分は Yaśomitra 註 p.467 ll.5-7 によって補った。 6) 大. 2, 784b には有我, 無我, 有我無我の 3 句を常 2 句の前に置く無記もある。 7) 『大明度』(大. 8, 491c), 『第四会』(大. 8, 816b), 『八千頌』Tib. 訳 (Peking Ed., Vol. 21, Mi, 160a²-161a⁴), 『八千頌』Skt. 本 (ed., P. L. Vaidya, p.133, l. 14-p.134, l.5), 『二万五千頌』Tib. 訳 (Peking Ed., Vol.89, Na, 252b²-253a⁷) も同じ。 8) ギルギット写本 (*Śatapitaka series*, Vol.10, part5, 170b⁹-171a⁴), 『二万五千頌』Tib. 訳 (Peking Ed., Vol.18, Thi, 66a⁴-66b⁸), 『初会』(大. 6, 557a-b), 『十万頌』Tib. 訳 (Peking Ed., Vol.16, Gi, 275a⁸-276b³) も同じ。また『大品』(大. 8,324b-c) は常 4 句が「神及世間」について言われ, 有限 4 句は「世間」についてのみ言われる点が異なるけれども項目の分別数と項目順はこのパターンに属する。 9) 『第三会』(大. 7,603c) も同じ。また『小品』(大. 8,558b) もパターンは同じであるが有限が「世間」についてのみ言われる点が異なる。『放光』(大. 8,77a) は省略形なので判断を保留する。 10) 宇井伯寿『印度哲学研究』第三卷, 246 頁参照。

〈キーワード〉 般若経, 阿含の表現, 無記, *avyākṛta*, *unmiñjita*-*nimiñjita*

(東方研究会研究員)